

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 号について
平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 号を発表したので送付します。

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	葉いもち イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	並 並 並	2 2 2
冬春きゅうり (半促成)	べと病 うどんこ病 褐斑病 ミナミキイロアザミウマ	少 少 やや少 並	2 2 2 3
冬春ピーマン	うどんこ病 ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ 黒枯病(仮称)	並 やや多 並	3 3 3
冬春トマト	葉かび病 コナジラミ類 ハモグリバエ類 トマト黄化葉巻病(TYLCV)	並 やや少 少	3 4 4 4
野菜・工芸作物 全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	4 4
かんきつ	そうか病 かいよう病 灰色かび病 ミカンハダニ	並 並 - 多	4 4 5 5
果樹共通	カメムシ類	-	5
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 並 並 並 やや多	5 5 5 5 6 6 6

作物の生育状況(4月中旬)

3月下旬以降平均気温がやや高めに推移し、早期水稲は順調な生育であった。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期、かんきつは新梢伸長期、茶は萌芽期～発芽展開期であった。

5月の気象予報

平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温、降水量、日照時間とも平年並の見込みである。(1か月予報 鹿児島地方気象台 4 / 2 2 発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の稲の草丈・葉令は平年並である。
- 2) 5月の気温・降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく伝染源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。
- 2) 曇雨天が続く場合はあらかじめ粒剤を施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに粉剤または液剤で防除する。
- 3) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 イネミズゾウムシ（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率41.7%（平年46.1%）及び百株当たり成虫数1.7頭（平年4.7頭）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

3 スクミリンゴガイ（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率18.7%（平年12.4%）は平年よりやや多、m²当たり貝数0.4頭（平年0.4頭）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。
- 2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。
- 3) 粒剤の水面施用に際しては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流し、落水はしない。

冬春きゅうり（半促成）

1 ベと病（少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率14.3%（平年79.2%）、発病葉率1.3%（平年19.5%）は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。
- 2) 肥料切れやなり疲れによる草勢の衰えは発生を助長するので、適切な肥培管理に努める。

2 うどんこ病（少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では、発生を認めていない

[防除上の注意]

- 1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。
- 2) 耐性菌の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。

3 褐斑病（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率14.3%（平年29.3%）は平年よりやや少、発病葉率2.0%（平年4.1%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率28.6%(平成19.9%)、1葉あたり成虫数0.32頭(平成0.38頭)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 収穫の終わった発生ハウスは太陽熱利用による蒸し込み等を行って死滅させる。

冬春ピ - マン

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率は40.0%(平成41.3%)、発病葉率5.6%(平成5.1%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、高温にならないように注意する。
- 2) 茎葉が過繁茂にならないように整枝を行い、発病葉は除去する。

2 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率50.0%(平成32.6%)は平成よりやや多、10花当たり虫数1.18頭(平成2.12頭)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 本虫は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。

3 ヒラズハナアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率10.0%(平成33.4%)は平成並、10花当たり虫数0.32頭(平成5.13頭)は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 本虫の薬剤感受性はミナミキイロアザミウマとは異なるので、薬剤の選定には注意する。

4 黒枯病(仮称) (-)

[防除上の注意]

- 1) 4月中旬の巡回調査ほ場では発生面積30.0%(前月20.0%)、発病葉率0.7%(前月0.3%)である。
- 2) 病原菌の生育適温は25~30で、今後気温の上昇に伴い、発生しやすくなるので注意する。
- 3) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 4) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。
- 5) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- 6) 同一薬剤の連用は、薬剤耐性菌の発生を招く恐れがあるので避ける。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率40.0%(平成17.8%)、発病葉率2.5%(平成4.1%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 コナジラミ類 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率20.0% (平年57.1%)、100葉当たり虫数1.5頭 (平年17.4頭) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 2) 気温の上昇に伴い、急激に増加する恐れがあるため、低密度時に早めの防除を行う。

3 ハモグリバエ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、被害葉の焼却処分及び初期防除に努める。
- 2) 栽培終了後は、土壌全面をビニルマルチで覆うかハウスを蒸し込んで死滅させる。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (-)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ (媒介虫) の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 栽培終了後はコナジラミ類防除後に株を抜き取り、10日間程度施設を密閉して本虫を死滅させた後、残さを処分する。
- 3) ハウスの周辺雑草は休閑期のシルバーリーフコナジラミの生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残さ及び野良生えのトマト等には特に注意する。

野菜、工芸作物全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップによる有翅虫誘殺数 (佐土原町) は、平年並である。

2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- 1) フェロモントラップによる誘殺数 (西都市、都城市) は、平年並である。

かんきつ

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生が認められなかった。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は萌芽期・落花期・幼果期である。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査 (中晩柑類) における発生面積率60% (平年21.1%) 発病葉率8.8% (平年3.3%) は平年並である。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は開花直前、落花期、梅雨期、秋芽生育期である。

3 灰色かび病 (-)

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は落弁期～幼果期である
- 2) 幼果表面に付着した発病花卉から幼果に伝染するので、枝をゆするなどしてできるだけ花卉の離脱を促す。

4 ミカンハダニ (多)

平成17年度 病害虫発生注意報第1号(平成17年4月27日発表参照)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率37.0%(平年24.3%)は平年よりやや多、寄生葉率17.4%(平年4.1%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%(1葉当たり虫数0.5～1頭)を目安に防除を行う。

果樹共通

1 カメムシ類 (-)

[防除上の注意]

- 1) 急に発生が多くなる恐れはないと考えられるが、局所的に発生する場合も考えられるので、結実中の園では飛来に注意し、初期防除を徹底する。

茶

1 炭疽病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率13.3%(平年27.4%)、 m^2 当たり病葉数0.1葉(平年0.6葉)は平年よりやや少ない。
- 2) 5月の降水量は平年並と予想されている。

2 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率46.7%(平年47.6%)、寄生葉率7.1%(平年6.3%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ-テ-ション散布を実施する。
- 2) 合ピレ剤の春季使用はリサ-ジェンスが発生しやすいので注意する。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では、発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、第1世代に対しては越冬世代の発蛾最盛期の17日後、第2世代に対しては第1世代の発蛾最盛期の10日後である。
- 3) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では、北諸県の一部の無農薬栽培茶園で少発生が確認されたもののその他のほ場では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬頃が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

5 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の払い落とし調査による発生面積率6.7% (平年6.2%)、払落虫数0.1頭 (平年0.1頭) は平年並である。

6 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の払い落とし調査による発生面積率33.3% (平年29.2%) は平年並み、払い落とし虫数1.3頭 (平年1.1頭) は平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 例年、2番茶期から発生が増えてくるので注意する。

7 クワシロカイガラムシ (やや多)

平成17年度 病害虫発生注意報第2号 (平成17年4月27日発表参照)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率53.3% (過去9カ年平均14.8%)、寄生株率19.3% (過去9カ年平均7.6%) はやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 第2世代幼虫の防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期であるが、第1世代の幼虫ふ化は平年より4～5日早くなっているため、ふ化状況をよく観察し防除する。
- 2) 薬剤散布は量を多めに (10a当たり1,000リットル)、枝幹に十分かかるようていねいに行う。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 (商品名、マリックス乳剤、粒剤等) は使用しないこと。

- 3 発生量 (程度) の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来防除速報にあたる)

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail : kushima-yoshiyuki

@pref.miyazaki.lg.jp